

2020年東京 パラリンピックの意義

日本障害者スポーツ協会 [会長]
日本パラリンピック委員会 [委員長]
東京ガス株式会社 [取締役会長]

鳥原 光憲

Mitsunori Torihara



2012年ロンドン・パラリンピックの車いすテニスで金メダルを獲得し、北京に次ぐ堂々の2連覇を遂げた国枝慎吾選手が、「ロンドンで観衆を沸かせたプレーを日本の大観衆の前で見せるのが夢だ」と語りました。選手・関係者の誰もが抱くその夢を2020年東京で実現できることに大きな意義を感じます。

パラリンピックの原点は、1948年ロンドン五輪に合わせて英国ストックマンデビル病院内で開催された車いすスポーツ競技会です。同病院のL.グットマン博士が、第2次世界大戦で脊髄を損傷した兵士の治療と社会復帰のために、リハビリの一環としてスポーツを取り入れたことに始まります。

歴史を経て今日、パラリンピックは「Parallel (もう一つの) Olympic」の言葉通り、五輪終了後に同じ組織委員会・競技会場で開催することが規程化され、五輪と並ぶスポーツ大会として位置づけられました。そしてロンドン大会では、164の国と地域から選手・役員6740人（日本選手団255人）が参加し20競技503種目を競う、史上最大の障がい者スポーツの祭典となりました。

わが国でも、1964年東京と1998年長野（冬季）のパラリンピックを契機に、障がい者スポーツが「リハビリ」から「生涯スポーツ」「競技スポーツ」へ多目的化して発展してきました。しかしロンドン大会の成績にみるように、日本は金メダル順位で24位に落ち、英国をはじめ欧

米先進国等との差が広がっています。国をあげてアスリートを育てる環境整備が遅れているためです。

スポーツには障がい者の自立や社会参加を促す大きな力があります。誰もが身近な地域でスポーツを楽しめる環境を整え、活力ある共生社会を築くために、パラリンピックでの日本選手団の活躍は大きな起爆剤になります。なぜなら、「失ったものを数えるな、残された機能を最大限に活かそう」というパラリンピック精神で、記録やタイトルに挑戦するアスリートの姿が、観る人に感動・勇気・希望を与え、障がい者スポーツひいては障がい者に対する社会の認識を改めるからです。選手・関係者が抱く夢の実現の意義はここにあります。

一方で、社会にあるさまざまなバリアが障がい者を「the disabled」にしている現実があります。人が誰も分け隔てなく、個性・能力を發揮して活躍できる、ハード・ソフト両面のバリアフリー社会を、2020年東京パラリンピックを契機に実現することが最大の課題です。それはあらゆる多様性を尊重する社会を育て、世界における日本の価値を高めます。いよいよ政府は2015年度「スポーツ庁」創設に向けた検討に着手しました。障がい者スポーツに国をあげて取り組むこの歴史的変革の目的を確実に果たすべく、そしてパラリンピック上位躍進を目指して、微力を尽くしたいと思います。